

研究

佐伯方言雑話 三

賛助会員 山内武 麒

ぞうくる

ぞうくるは、からかう、ふざける、の意味。大分・熊本地方の方言である。ふざけるな、冗談言うなというところを、ぞうくるなと制止するのは、私もがよく使う言葉である。ぞうくるを「象くる」ともじつて「ぞうくるな、ここは竹藪ぞ」などという。象には竹藪が恐ろしい所らしい。ぞうくるなをぞうくるなという人が多い。

ぞうくるはどくろの訛である。どくろはどくろの転で、どくろは「道化」と書き、道化をする。滑稽なことをする、おどける、ふざけるの意である。道化は、道法をもつて人を教化するという、しかつめらしい意味の言葉であったが、何時の間にか、人を笑わせる言葉も動作。おどけ、滑稽ものを意味するものに変ってしまった。

現在、道化師とか道化者というコメディアンが、舞台やテレビで、そのおどけた言動を売り物にして、世智がら世の中を笑いの一とときをよそっているが、道化にも限度があり、あまりぞうくり過ぎると嫌気がさす。

適度なところで竹藪に入る必要がある。

ちっちん

片足でびよんびよん跳び歩くのをちっちんという。こどもころ、びっこをひいて歩く人を見ると「ちっちんちん」と、悪たれ口をついていた。  
ちっちんは、ちんちんもがむがむの転である。片足を後にあげ、他方の足一本で跳び歩く遊戯で、ちがちが、ちんちんもんがら、ちんちん、けんけんなどの別名があるが、佐伯地方のちっちんが、他の呼び名より、片足跳びの実感が一番よく出ているようだ。  
小学校のとき、ちっちん合戦やちっちん相撲をよくやった。ちっちんしながら石けりをするとか、鬼ごっこをするとか、ちっちんしながら遊ぶ遊戯は沢山あった。

ちよこ

さかづきのことをちよこともいう。ちよこ猪口と書いて、ちよくの転じたものである。ちよくも猪口と書く。猪口と読むのは、鐘の入声の字音というし、また福建音とも、または朝鮮音であるともいう。陶磁器で、形小さく、上開きで下すばみの酒杯、すなわちさかづきのことである。膝栗毛に「ちよくにいつぱいいで一口のみ……」とある。

水膳料理の小井。また刺身、酢のものなど入れる小さく、密も猪口と呼ぶ。

ちよく、ちよこのつく言葉は色々ある。

○ちよくいばい 佐伯方言で、酒をのませて、おのれの意に従わせることをいう。ちよく即ち酒で相手を買収すること。

○ちよこざい 猪口才と書き、さしでがましい、小ざかしい、小利口、すばしいものの意である。

○ちよこちよこ 小股で走るさま。幼児の歩くさま、拳動の落着かぬさま。また、しばしば、ちよいちよい

の意。

○ちよこんと、小さくかしこまって動かぬさま。

○ちよこまか、拳銃の落ちつかぬさま。

○ちよこつと、寸時・ちよつと。

○ちよびつと、少し。わずか。七まんぼり。

### つくなむ・つくばう

つくなむもつくばうも、しやがむ、うずくまる、かがむの意味である。全国方言辞書を見ると、つくなむは、島根・広島・山口の各県と四国の方言で、九州では佐伯だけの方言になつてゐる。また、つくばうは、新潟・岐阜の一部と、富山・奈良・岡山・大分各県の方言になつてゐる。広辞苑を見ると、つくばうは、へくなむはない。

つくばうは、つくばふで古語である。蹲ふ、踞ふと書いて、突き這ふがその語源である。

茶室の近くの庭に、低くすえてある手洗ばちき、つくばいという。これは低いので、茶室が手洗う時につくばうから、この名がついたという。つくばいは蹲踞と書く。

平身低頭することを、へいつくばうという。「へいつくばつて平あやまりに謝る」という。

### つっこする

「つっこすつて、も知らぬ顔をしてゐる」という。道ですれちがつても気がつかないのを、当てこすつて言つた言葉である。この意味ならまだしも、時には些細ないさ、かいごとで意志の疎通を欠ぎ、道で出会つても見ぬふりして通り過ぎると、怒りをこめて、この言葉を吐き出すのを聞くこともある。

つっこするは、突きこするの促音化したもので、こす

るとは、すり及びぐ、やすりでする、おしつけてするの意であるから、体と体とがぶつつかるようになり合わな

くては、つっこするとは言えない筈である。すれ違ふさまを誇張して表現した言葉である。

つっこすると同じように、突きを「つっ」と促音化した言葉の中から、目ごろ使う言葉を拾つてみよう。

- つっかけ    ○つっかける    ○つっかやす
- つっきる    ○つっくやす    ○つっかさす
- つっこ反    ○つっこむ        ○つっころす
- つったつ    ○つつつく        ○つっばなす
- つっばる

まだ外にたくさんあるだらう。

### てがましい

がさがさと何にでも手出しをして邪魔することをもて、「てがましい」と一喝してゐる親父の声を聞くことがある。

このてがましいは、手がかましいの意である。かまひはかまひの口語である。かまひはかまひすしと同じ意で、さあがしい、やかましい、の意である。肥前風土記に、「天竺と勅りたまひしく『蠅の声、甚かまひ』とのりたまひき。『てがましい』とある。

てがましいは、手がかましいで、手を出してやかましい、うるさいの意である。佐伯の方言に、やぞかまひいという言葉がある。さあがしくてうるさいの意で、これにもかまひいがかつてある。

てがましいの意味によく似た言葉に、てんごうがある。いたずら・じようだん、手出し、おせっかい、の意がある。「てんごうするな」は、いらぬ手出しをする女の意

味である。このふんごうは、淨瑠璃の中によく出てゐる。

### なえ

なえとは、地震のことである。今の人で地震のことを、なえなどという人は減多にないが、ごく年寄りの人たちが、  
「なえを時たま聞くことがある。地震があると、  
「なえがいった。今何どきか」といつて、天気を予告していた。  
昔の人は「五七の雨に八日照り、四つ六どきはいつも大風」といつて、地震のいつたときで天気を予想していた。五つ七どきなら雨、八つなら晴、四つ六つ晴なら大風と予報していたのである。

函 五つ——八時ごろ、七つ——四時ごろ、八つ——二時ごろ、  
四つ——十時ごろ、六つ——六時ごろ。

このなえは、古語のなぬから転じたものである。なぬの元の意味は地である。なぬふるといつて、地がふるいうごく、地震がするの意であったが、なぬを地震の意に使うようになった。方丈記に「おそるべかりけるは、ただなぬなりけりとこそ覚え侍りしが……」とある。このなぬが訛つてなえになつたのである。

「地震、雷、火事、親父」と、昔から世の中で恐ろしいものをあげてあるが、その筆頭に数えられまゐる地震は、方丈記にあるように、おそろしいものは、ただなえであると言え侍り、地震には充分に注意が所要である。

### なおす

昔のことであるが、佐伯から東京の某小學校に転勤した一人の若い教師があつた。赴任して間もないころ、ある日國語の時間中、生徒たちに教科書を机の中にしませよと、「本をなおしなさい」と佐伯方言を丸出しで命じた。児童たちは一斉に机の上の教科書を、きちんと真

直に置きなおした。本をしまおうとしないのを見た先生は、自分の言葉が方言であるのに気がつかず、再び大声で「本をなおしなさい」となった。児童たちはきまもとんとした顔で、教壇上の真赤な顔をした先生を、見守るばかりであつたという。

物をしまふ、片附けることを、佐伯ではなおすといふ。このなおすは、筑紫方言であるが、関西以西ではどこでもなく使われているらしい。

なおすは直すで、辞書を見ると、  
「よく」なる、後帰させる、改める、かえる、修正する、訂正する、添削する、とりつくろふ、とり直す、正しい位置にすえる、修繕する、病氣を治療する、などと色々な意味があり、最後は「方言」しまふ、収める、片づけると出ている。

### ねんごくせえ

ねんごくせえは、喧嘩のときによく出る言葉である。ねんごくせえなという。生意氣な、こしやくな、しやくらくさいの意味である。

ねんごくせえは、ねんごくさいの訛つたものである。が、この言葉の語原は何であらう。

辞書で、ねんこ・ねんご・ねんこうと調べてみた。

ねんこは、拈古と書き仏教語で、古人の逸事を謡出して批評すること。拈提、拈財ともいふ。

ねんごは、拈語と書き、これも仏教語で、禅僧が引用して他に示す語。古則、公案の類である。

ねんこうには二つの意味がある。一つは拈香と書き、香をつまんで焚くこと、すなわち焼香の意。または拈香文のことをいふ。拈香文とは、禅宗の僧が死者に對して哀悼の意を表わして朗誦する文である。また一つは總公

